



令和5年度

学校だより

5月号

～ひとがすき まちがすき いわさきの子～

横浜市立岩崎小学校

電話 331-5123

FAX 331-5343

正門横にある二宮金次郎の像

校長 小林 雅弘

本校の正門横には、二宮金次郎の石像があります。昭和の初め頃から、全国の小学校でさかんに建てられるようになりました。以前ニュースで「薪を背負って本を読む姿は、歩きスマホを助長させる」などの批判があり、撤去したり、座った像を設置したりした学校があると聞いたことがあります。様々な意見があることは否定しませんが、私はそうは思いません。そもそもなぜ、二宮金次郎の像が小学校に建てられているのか、その背景を理解することが大切です。何となく「勤勉の象徴」というイメージはありますが、いったい何をした人なのでしょう。



二宮金次郎は、江戸時代後期に多くの農村を救った農村改革の指導者です。1787年、相模国足柄上郡栢山村（現在の神奈川県小田原市）に生まれました。彼の家はもともと比較的裕福な農家でしたが、5歳の時、暴風雨による酒匂川の決壊により田畑を全て流され、財産を失います。14歳の時に父親が亡くなり、母と二人の弟を支えるため、毎日家から一里もある山に薪を拾いに行きました。「ただ行き帰りするだけでは、時が無駄になる」と考えた金次郎は、「論語」などの中国の古い書物を読み、懸命に勉強しました。像はその頃の姿を表しています。

父を失った2年後、16歳の時に母も病気で亡くなってしまいます。金次郎は、おじの家に預けられましたが勉強はやめませんでした。夜明かりをともし本を読んでいると、おじの万兵衛は「農民が学問をして何になる。あんどんの油代だってただではないんだぞ。明かりを消してさっさと寝るんだ。」と言って叱ります。そこで、金次郎は空き地に菜種を植え、その種を村の油屋に持って行き、「これを油とかわしてください。」と頼み、手に入れた油で勉強を続けました。

やがて、金次郎はおじの家から独立し、実家の再興に取りかかりました。そして勤勉と儉約に努め24歳で以前のような裕福な家を再興しました。それを知った小田原藩士服部家に財政の立て直しを頼まれ、これも成功することができました。それが広まり、今度は小田原藩の分家にあたる桜町領（現在の栃木県二宮町）の再興を依頼されました。人生終末は、本校が修学旅行でも行く日光領の再建をめざし、1856年日光に近い今市市の如来寺に葬られました。「私に立派な墓はいらん。土まんじゅうの墓のそばに、一本の木を植えてくれ。それで十分だ。」と言って息をひきとったそうです。70年の生涯を閉じるまでの間に615もの村々を立て直し、たくさんの人々の命を救ったと言われています。金次郎の思想は、その後トヨタ自動車の創始者 豊田佐吉、パナソニックの創始者 松下幸之助、さらには、まもなく一万円札の肖像となる渋沢栄一などの実業家に受け継がれています。

岩崎小学校の校歌の中に、「心を磨き、体を鍛え」「今日も元気で励もうよ」「今日も楽しく学ぼうよ」「今日もなかよく進もうよ」などの歌詞があります。私はこれらの言葉と、金次郎の生き方が重なるように思えます。このように背景を知ると、これまで何気なく目にしている本校の二宮金次郎の石像も、いつもと違って見えるのではないのでしょうか。

小田原市栢山に、金次郎の功績を伝える「尊徳記念館」があります。今度の連休に出掛けてみようかなと思っています。